

第四話

アラビアの水観

都市は汚れている

最初に結論的なお話を申しあげておきたいと思ひます。いろいろ調べてみましても、アラビア人というのは水について非常に唯物論的な考え方をしていると感じられます。水そのものについては、何の幻想ももっていないという感じがいたします。たとえば日本人の場合ですと、水神さんとか、正月の若水とか、水の精とか、水そのものについて何か神聖な感じを持っていると思うのですが、アラビア人の場合は一切そういうものはありません。純粹にドライといいますが、水は水だということだけで付き合っているということが非常に強く感じられます。

ちやうど日本人が水に感じているような感じ方を、アラビア人の場合は、水にはなく、砂に感じております。砂漠です。砂漠につきましては、神聖な場所とか近寄りがたいとかちやうど日本人が水域に抱くような幻想的な感じを、むしろ

石丸 浩

砂に求めております。たとえばアラビアンナイトに出てくる魔鬼といひますか、悪魔の神。こういったものを砂漠に吹く砂埃の現象の中から想像するとか。あるいは月夜の晩に砂漠に一人で出たら駄目だ、歩いては駄目だという諺があります。これは、月夜の晩に砂漠に出ますと清冽な感じがして、人間は氣違ひになるといふように、砂あるいは砂漠に対してはちやうど日本人が水について感じるような幻想を持っています。具体的に申しますと、ムハンマドが生きていたような時代ですから、まだ村かもしれませんが、その当時から、都市は汚れている、砂漠は清浄だという觀念がずっとあります。これは最近まで続いているようです。都市＝オアシスなんです。が、都市で生まれた赤ん坊を里親に出すという場合には、砂漠に住んでいる住民（ベドウィンといひますが）のところに里親にだして小さな子供の時代は育ててもらつて、成長すれば連れて帰る。そういうようなところからも、砂に対する清

浄感、ある種の幻想といったものが非常にあるという感じがいたします。

清潔は信仰の半分

もう一つ結論的に、今回調べていて痛切に感じたのですが、これはまだ実証的なことははっきりしないのですが、どうも現在われわれが使っている近代的な上下道というものの発端は、アラビアに求められるのではないかとという仮説的な考え方ができるとい感じが非常にしております。

これは、歴史的に考えましても、ちょうど西洋の中世暗黒時代、その時代がアラビアでは一番開明的な時代でして、いろいろなものが花開いています。ギリシア・ローマ文化がアラビアに入ったあと、十字軍とかスペインを通して西洋の社会にアラビア文化が入ってきた。そういう流れを通して、古代ローマの上下水道も西欧の世界に入ってきたということが常識的には言えるのですが、私の感じましたのはもっと宗教的なもので、つまりアラビア人というのは非常に清浄感、清潔感という事を重視するということです。

たとえばムハンマドの言葉の伝承で「ハディース」というのがあるのですが、これは『コーラン』には入っていないのですが、ムハンマドから直接聞いたという伝承がたくさんありまして、その伝承というのは大体十万件くらいある。その

中にある言葉で「清潔は信仰の半分である」という言葉があるわけです。とにかくイスラム、回教徒は清潔でないと駄目だ。清潔が保てれば、半分は信仰に入ったに等しい。そういう考え方があります。ですから、基本的なところで清潔感を重んじるという、イスラムの根本的な思想があり、それが水管理とかいったものを通して西洋のほうに入ってきたという感じを強くもっているわけです。それにつきましては、後ほどまた具体的な事例も一緒にして述べていきたいと思えます。

特に感じましたのはそれくらいでして、以下は雑談めいた話になりますが、「アラビアの水観」というテーマで調べた理由というのには、私どもの新聞で「日本人と水観」という座談会を年に一回やっております。それらによって日本人の水観というのは分かるのですが、では外国人の場合も日本人と同じような水観をもっているのだろうか。あるいは全然違うのだろうかという疑問が一つありました。たとえば水の非常に乏しいアラビアの人々というのは、水についてどのような考え方をもっているのかという問題があります。

もう一つは、私は学生時代にアラビア語を専攻しまして、『コーラン』というのがあるのですが、試験のたびに付き合わされまして非常にウンザリした記憶があります。これは、ご覧になった方もあるかもしれませんが、内容的にはつまら

ない、退屈な、『アラビアン・ナイト』などと全然違う面白くない本なのですけれど、それを読みながら感じましたのは、砂漠の中で形成された文章にしては、水についていろいろ出てくるわけです。これは逆に、水がないところで形成されたからこそ、水についての話が出てくるのかもしれないが、とにかく立て続けのような感じで水についての話が出てまいります。

そういうことが記憶にありましたもので、今回、「日本人と水観」に対する「アラビア人の水観」ということで、特にアラビアについて、一度、研究してみようという気持ちになつて調査といえますか研究をしてみましたわけでございます。

アラビアとは何か

まず表題に使わせてもらった「アラビア」という名称ですが、これはたとえば平凡社から『イスラム事典』という本が出ていますが、こういう本を見ましても「アラビア」という項目では出てないんです。たとえば「アラビア語」とか「アラビア科学」とか「アラビア半島」とか、そういう形では出てまいります。「アラビア」という言葉は日本人の間には非常に浸透しているのですけれど、学問的には曖昧な言葉らしいのです。しかし、広辞苑には「アラビア」という項目はちゃんと載っています、これは「アラビア半島のこと」

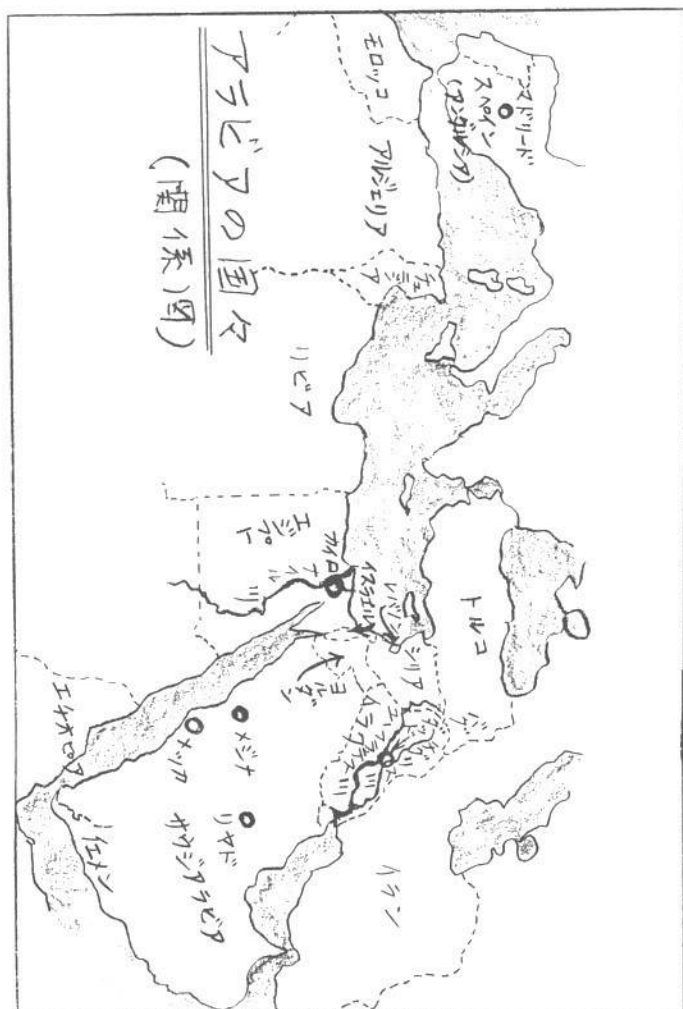
とはっきり書いてあります。

ですからアラビア人というのは、結局はアラビア半島に住んでいる人々をアラビア人という。しかれば、たとえばバグダードに住んでいる人々はアラビア人ではないのかといえますと、これも生粋のアラビア人です。バグダードというのは、『アラビアン・ナイト』の主要舞台ですから。

ですからアラビア人というのは、サウジアラビアのアラビア半島を中心にしてイラク、シリア、ヨルダン。アフリカのほうにまいてまして、エジプト、リビア、チュニジア、アルジェリア、モロッコ。大体このあたりに広く分布して住んでいる民族をアラビア人と称しています。

最近まで戦争をしていたイラン。これはベルシャ人で全然民族が違います。回教徒ですけれど、民族は違う。それからご承知のとおりイスラエルはユダヤ人ですから違うわけです。ちようど、現在中近東で紛争のあるのは、アラビア人対そうでない人々の紛争だということも言われているわけですが、そういうふうになります。

これが大体、アラビア人の住んでいる範囲ですが、回教徒ということになるとインドネシアからアフリカ中・南部まで広く分布しております。しかしアラビア人ということになるとさっき申した範囲内に住んでいるということです。人口は三億人ぐらいです。



こういうふうによく分布していますので、国も違いますけれど、その中で共通的なことは何かといえますと、一つは当然ですが砂漠地帯。非常に水が少ない所に住んでいるということが一つあります。「理科年表」に一年間の降水量が出てくるのですが、たとえばリアドで年間通して八十一ミリです。日本に比べれば全然少ない。六月から十二月にかけては、全然降らない。ほとんど雨が降らないような環境の中で生活している人々であるということ。

ついでに土地利用の割合ですが、ともかく森林とか一遊牧民とはいいますが牧草地もほとんどございまして、ほとんどが砂漠です。砂漠の中のオアシスを中心にして、ごく限られた範囲内で農耕生活がある。こういう自然環境の中で生活しているのがアラビア人であるということ。

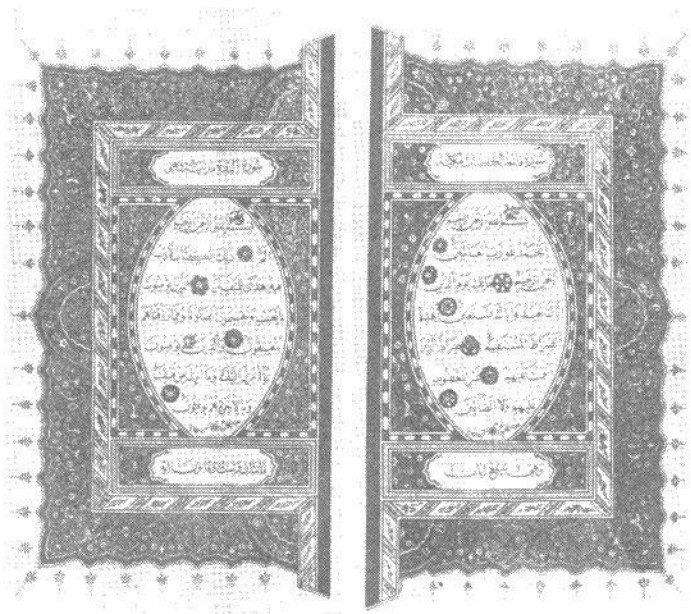
アラビア人に共通する第二点は、これも当然ですがイスラム教徒である。イスラム教徒であるというのは、水観にも非常にかかわってまいりまして、現在、イスラム教徒というのは、アラビア語で書かれた『コーラン』を毎日朗読しているんです。小学校に入りますと、まず『コーラン』の暗唱から始めるといぐらい普及しています。ですから、『コーラン』の教えに基づいて、全員で半ば宗教生活をしているような感じだと考えられるぐらいの信仰です。一部にキリスト教徒も入っていますが、アラビア人のほぼ全部がイスラム教徒であ

るということです。

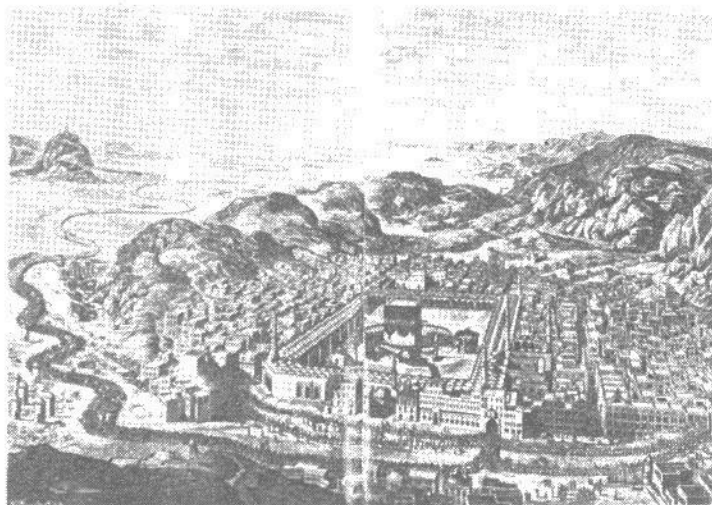
三つ目の特色として、アラビア語をしゃべっているということですが、国は違いますが、全部、アラビア語です。ここでちょっと余談になりますが、面白いと思いますのは、正統アラビア語といいますが、中国でいう北京官話に相当するような正統アラビア語というのは、実際は、すでに世界中のどの国でもしゃべられていないのです。しかし正統アラビア語というのが存在する。それは、『コーラン』に書いてある言葉である。どこの国でも全部それぞれの方言でしゃべっている。カイロ方言とかバグダード方言、モロッコ方言、そういう方言で話しているのですが、その中で正統なアラビア語は何かというと、『コーラン』の言葉である。『コーラン』の正統アラビア語というのはどこにもしゃべられていないのですが、しかしアラビア人は全員が知っているのです。

ですからちょうど、中世ヨーロッパのラテン語——ラテン語の場合は、聖職者とか上層階級しか通用しなかったものですが、アラビア語の場合は『コーラン』を通して子供から年寄りまで全員が正統のアラビア語を知っているということで、なおかつその言葉自体は日常生活の言葉としてはどこにも使われていないという奇妙な言語であるわけです。

ですから、アラビア人というのは①大体砂漠地帯に住んでいて、②アラビア語を話して、③全員がイスラム教徒である。



コーラン 開扉の章 雌牛の章冒頭(バグダード 1951年刊、東洋文庫蔵)



メッカ (農耕を拒否した砂漠の聖地。18C)

この三点から「アラビアの水観」というものが形成されてくるのではないかと考えるわけでありませう。

『コーラン』の水観

それで、現代のアラビア人の水観ということになると、昔とかなり違っているのではないかという感じもあるのですが、さっき申したようにアラビア人というのは都市に住んでどういう近代生活をしましても、常に『コーラン』との結びつきがありますので、結局、アラビア人が水についてどういう考え方を持っているかということ調べるためには、『コーラン』の教えで水をどういうふうにとらえているかを把握すれば、基本的なところがつかめるのではないかと考えて、今回は『コーラン』を中心にして調べてみたわけでありませう。

さっきも申しましたように、『コーラン』は非常に水についてアレコレ書いていますので、私も二十年間ぐらいアラビア語に接していませんので、翻訳に沿って、これは岩波の文庫本なのですが、これに沿ってずっと調べてみたわけです。

非常にいろいろなことを言っておりますが、結局どういふことを言っているのかといいますと、まず「水、イコール天国」という思想が一番顕著に出ております。アラビア人は水という言葉を知れば、天国、楽園ということ連想する

のではないでしょう。

第二章二十三節に「やがて潺々（せんせん）と河水流れる楽園に赴くであろう」とありますが、こういうふうな表現で、コーランに出てくる天国の描写というのは、「潺々と河水流れる楽園」というのが枕言葉のように、天国の描写にはかならず水が出てまいります。水への渴望がよく分かります。

これも余談になりますが、ムハンマドは西暦六一〇年ぐらいから活動を始めるのですが、その頃メッカでは偶像崇拜が盛んだったわけです。七世紀初頭ですから日本でいいたら推古天皇とか舒明天皇あたりですが、ムハンマドが出るまで、アラビア人には来世についての考えが全然ないんです。この世限りである。それは非常にはっきりしています。いろいろな偶像を崇拜しているのですけれど、それは、この世の幸せ、この世の利益をお願いするだけのものであったわけです。これは、宗教学のほうでも非常に注目されているようです。

そういう所にムハンマドが出てきて『コーラン』をとこなえるのです。ムハンマド自身も最初はこの世という考え方は全然なかったわけですが、彼の場合はメッカの商人ですから、イエメンのほうからメッカを経てシリア、エジプトのほうへキャラバンを組んで行っていましたので、その当時すでに普及していたキリスト教あるいはユダヤ教の人々との付き合いを通して、はじめて、あの世といふ世界と

いうことを知りました。そういうふうなものに影響されて、『コーラン』の啓示もだんだん充実してきたと言われているが、そこで初めてアラビア人は「あの世」ということを知ります。

来世のことなど全然念頭にない人々に説明するわけですから、その必要上、あの世とはこういうところだということを具体的に説明しないと分からないのです。その時に、一番の決め手として使われたのが水です。あの世へ行くと水がある。だから、改宗して信者になりなさいという形でムハンマドは宣伝しております。これは『コーラン』の中にたくさん出てまいります。まず、言えることは天国・楽園イコール水だったということでありませう。

楽園・天国に対比するものとして当然、地獄というものがあるわけですが、地獄はその逆ですから、普通に考えますと、水のない所が地獄であるというふうに感じられるのですが、ムハンマドの場合は不思議に、地獄には水がないというところは一言も言っていないのです。地獄とは何かというと、熱湯があると言っています。

第十八章二十八節には「助けを求めて喚び呼べば、どろどろに溶かした銅さながらの水をあげせられ」と出てまいりますけれど、銅をグツグツ煮沸しているような煮え湯を飲まされるのが地獄であるというふうな表現で地獄を表現していま

す。これも考えてみますと、砂漠ですから水が全然ない。水を求めてさまよっていて、水らしいものが見つかって、そこへ行ってみたら水ではなく、熱湯だった。到底飲めない。水に対する渴望の逆手をとったといえますか、そういう形で地獄の残酷さ、酷さのようなものを表現していると考えられるのですが、とにかく地獄の表現の時にはかならず熱湯が出る。水のような形をしているのだけど全然飲めない、火傷をするという形で地獄を説明しています。水がないということから来る表現方法として、面白いのではないかと考えるわけでありませう。

水はアッラーのもの

その次に顕著に表れていますのは、そういうふうには水が非常に乏しいものだから、水というものに対して、「『コーラン』というものは唯一神というものを奉りまして、その唯一神アッラーの教えがムハンマドを通して啓示されたという形をとってしまして、つまり信仰の対象はアッラーという神であるわけですが）、その水を管理するのはアッラーである。だから水はアッラーがつくったものであるということをし繰り返してまいります（「アッラーこそはお前たちのために天から水を降らせてくださるお方」〔第16―10〕、「この水を天に蓄えているのはお前たちではあるまい」（第15

—23)。

『コーラン』を基に、後世『イスラム法典』というのできるのですけれど、そのイスラム法典の水観の中に明確に出ていますのは、三本木健治の『比較水法論集』（水科学研究所刊）という本の中で指摘しているのですけれど、イスラムの水法の特色は、水というのは神（アッラー）がつくったものであるから、人間にとっては共有である。共有である共同所有の思想がはつきりしているということ。同時に第二点として公平分配——公平に分配しなければいけないということで、そういうふうに関共有と公平分配の思想として法文化されているのですが、その基本は「水はアッラーがつくった神の水だ」ということから発していると考えられます。とにかく『コーラン』は水というのは、唯一神アッラーがつくったものであると、繰り返し強調しています。

ムハンマドは、アッラーの教えをみんなに伝えるのですけれど、伝える場合に説教するわけですが、説教する場合の「決め手」に水を使っているのです。『コーラン』に出てくるのですけれど、たとえばアッラーの神を信仰すれば、水を与える。信仰しなければ水をやらない。そういう形でしょっちゅう出てまいります。

たとえば第二十三章「信仰者」のところの第十八節ですが、「また我等アッラー、天から適量の水を降らせてこれを地上

に止めておいた。もちろん、いざとなればすぐ取り上げてしまうのも、訳ないことだ」というふうにありますように、もしい信仰しなければ水をやらないという思想がそこら中に出てまいります。貴重な水というものを、信仰を勧める時の切札に使っている。そういう形で水というものが使われるわけです。これは、日本などでは考えられないことです。水は取引きの材料とみなされていて、水に対する「思い入れ」は皆無です。

水がなければ砂！

次に第五章「食卓」のところを見ますと、「礼拝のために立ち上がる場合は、まず顔を洗い、次に両手を肘まで洗い、それから頭をこすり両足をくるぶしのところまで洗い、それから状態にある時には（これはどういう状態かは不明らしいのですが）それを特に清めなくてはならない。隠れ場所から出てきたとか、妻に触れてきたとかした場合、もし水が見つからなかったら綺麗な砂をとって、それで顔と手をこすればよろしい」（八、九節）という表現が出てまいります。ご承知のとおり回教というのは礼拝を非常に重んじまして、『コーラン』では一日三回と決められています。「ハディース」のほうでは五回となっていて、現在は五回ということになっているのですが、礼拝をする時にはかならず水で手足、体を

清めよということを言っています。

ここでは当然、水の浄化作用に注目しているのですが、それと同時に手近に水が見つかからない場合は砂でよい、というふうな所がちょっと特色ではないかと思うのです。普通われわれの場合ですと、水の浄化作用を認めてそれをフルに活用しているのですけれど、水が少ない所ですから、飲み水以外の水の効用として浄化作用があるわけですけれど、その浄化作用を使用する場合に水がもしない場合は砂でよいという形で出ているわけです。

さっき申したように清潔は信仰の半分であるという形で、清潔感を保つために水を使う。その場合は水の浄化作用を使用するということですが、水がない場合は水の代替として砂を使う。砂漠で生活するぶんには、水は乏しくても砂だけはふんだんにある。しかし都市の場合はどうであるか。

十世紀前後ぐらいからだんだんアラビア圏・回教圏が広がりました、あちこちに都市ができます。都市の大半は、川のそばの、大きく言えばオアシスに都市が形成されるのですけれど、都市が形成された場合、まず都市生活を営むために水が必要なのですけれど、人間生活に必要な水よりも前に礼拝をするために水が必要だったわけでありました。

モスクを中心に

礼拝場としてモスクをつくるのですけれど、モスクをつくる場合には、かならず一番清浄な水をモスクへ引いてこなければいけないということがあります。

砂漠の場合ですと、もし水が手近にない場合は砂を使えばいいのですけれど、都市化しているのは砂はない。どうしても水が必要です。これは飲み水だけではなくて、一日に五回礼拝するためには必ず清浄な水が必要だということ、モスクをつくった場合はまず第一に水を引っ張ってくるんです。

これは、水盤といひまして水を受ける盤をつくるのですけれど、水盤をつくる時に、これはいろいろな学者が研究しているのですけれど、ローマの水道技術を取り入れて、地下水道（ガイル）を通してモスクまで水を引っ張ってきました、そこに水飲み場（サビール）をつくって、それでまず清浄な水を確認する。確保した水も、そのまま放りっぱなしにしておくと汚れてきまして、不潔感といひますか、清浄感の反対の方向につながるというので、排水のほうも考えまして、綺麗な水を引っ張ってくる上水関係と、それを直接に排除する排水関係というのが、早くからモスクを中心にして形成されたというようなことが、いろいろな本に書かれています。

ですから、まず都市ができてそこにモスクができて、モスクを中心にして上下水道が整備されていったということになります。たとえば研究書に近い作家・堀田善衛の『ゴヤ』。

ゴヤですから、スペインが舞台なのですけれど、スペインを紹介するにあたりまして、スペインの首府マドリードという町がどれほど不潔だったかということの対照としまして、アルハンブラがあるアンダルシアの町々、アラビア人の入っていたスペイン半島の南半分の都市には上下水道が完備している非常に清潔だったと。ところが北のほうの町は非常に汚いというふうなことを書いています。

そういう形で、とにかくイスラム教徒の住む所にはモスクができて、モスクを中心にして上下水道が整備されていって、そういう都市衛生思想がスペインなどの南ヨーロッパを通してだんだん浸透していったのではないかというふうに、私などには考えられるわけがあります。

その場合も、普通でしたら人間が清潔で快適な生活をするための上下水道というふうに考えるのですけれど、アラビア人の場合はあくまでも宗教のためです。礼拝を『コーラン』の教え通りに実行するために上下水道整備というのが必要だった。そういう思想が根底にあつて、それが少なくともスペインの場合にはそういう思想から、後にマドリードなども上下水道が整備されるのですけれど、そういう影響の下に上下水道が整備されるという格好になっています。

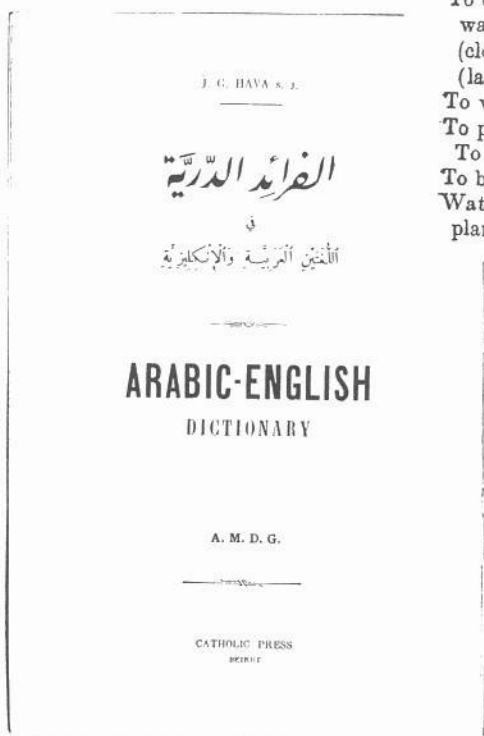
水による等級付け

とにかく非常に水の貴重な所ですので、そういう中で生活するアラビア人の使うアラビア語をいろいろ研究していますと、いろいろな物事が、水によって等級付けられています。名称にしましても水を基準にしているいろいろな名称が付けられているわけがあります。

たとえば「砂漠」というのは、「HAVA」と呼ばれている辞書で堀内勝という人が調べたら、一般的にはサハラというのですが、サハラとは元々アラビア語で砂漠といいますが、砂漠の全体的な名称としてサハラという言葉があるのですけれど、アラビア人の場合はサハラという言葉一般的な名称を使わないでいろいろな言葉を使い分けているわけがあります。その言葉の種類が大体六十〜九十種類ぐらいあるそうです(『砂漠の文化』教育社歴史新書より)。私もそれには驚きました。

その砂漠を命名する場合に、何を決め手にしているかというところ、水のあるなしの具合によっているのだそうです。代表的な例では、水辺に近い砂漠の場合は、バリッサというのです。バリッサといったら、これは水辺に近い砂漠という意味であります。反対に水辺に遠い地域の砂漠のことは、ジャッダーウというのですがこれは水を欠く砂漠。

ですから必然的にバリッサというのは、羊飼いや住んでいる砂漠地帯のことをバリッサといいます。そういうような形で、水に近いとか水に遠いということ砂漠そのものも



To hold *مَاهَ اَ وَ مَوْهًا وَمَاهَةً* * a o ماه *
much water (well). To draw water
(ship).

To give water to. *وَأَمَاهَ* هـ —

To mix a. th. with. *مَاهَ مَوْهًا* هـ ب

To abound with water (place). *مَوْهَ*

To gild or silver (a metal). *هـ وَهَ* —

To put water into (a kettle). To

puzzle, to confuse a. o.

To embellish (a narrative) *هـ عَلَى* —
to.

Do not delude thyself. *لَا تُؤْمِمْ بِكَ*

◆ He dispelled (cares) *مَوْهَ عَنْ بَالِهِ* هـ
from his mind.

To come upon *أَمَاهَ إِمَاهَةً وَأَمَوْهَ إِمَوْهًا*

water (digger). To yield much rain

(clouds). To be full of water-springs

(land).

To water (cattle). *هـ —*

To put water into (an inkstand). *هـ —*

To whet (a knife).

To be sappy (tree). *تَمَوْهَ وَهَ تَمَاوَى*

Water. Juice, sap of *مَاهًا* *بِهَ أَمْوَاهَ وَمِيَاهَ*

plants.

名称が違うという形で表れています。

砂漠には遊牧民、ベドウィンが住んでいるのですが、ベドウィンの言い方にも二つありまして、アルフ・ガナムというのとアルフ・バイールというのがあります。水辺に近い所で遊牧生活を送っている遊牧民のアルフ・ガナムの場合には飼っているものは主に羊です。遠くのほうに住んでいるベドウィンのほうはアルフ・バイールといまして、これはラクダを主として飼っている遊牧民のことを称します。水辺に近いとか水辺に遠いということ、ベドウィンの名称も変わってくるということ、

これがラクダになりますと、それを指す言葉は非常に多くて百種類とか百数十種類とかいわれています。ラクダは普通はジャマルというのですが、調べてみたら他に一杯あります。ラクダの名称は何によってつけられているかという、日本ですと一コブラクダとか二コブラクダというのですが、アラビアでは何日水を与えないでももつつかということによって決めています。

「毎日給水ラクダ」というのがあります。これは、毎日水を与えないと使えないラクダという意味です。これをウライジャールウといいます。「三日給水ラクダ」というのがあります。これはサワーミス。四日給水ラクダがラワービウ。五日給水ラクダがハワーミス、六日がサワーデス、七日がサワ

ービウ、八日がサワーミン、九日がタワーミウ、十日がアワールというふう、日数よって全部ラクダの呼び名が違うわけです。そしてそれぞれ区分けして使っています。一日給水ラクダ、三日給水ラクダというふうにして、今回の旅行はこうだと、だったらタワーミウを持っていくとかという形で使われています。ラクダの名称、等級も、給水状態とか水によって区分けされています。

アラビア人ですから、小隊を組んで、キャラバンを組んで旅行するわけですけど、旅行はアラビア語でサファルといっています。これはアフリカなどで使われているスワヒリ語のサハリと同根だろうと思われれます。

その場合も、たとえば「無水四日旅行」——水なしで四日過せる旅行の場合は、サイル・リヴウ。無水五日旅行、これはサイル・ヒムスといふに、大体旅行する場合は三日、四日ぐらいで旅行するらしいのですが、三日行程、四日行程というふうに分ける場合に、三日間水なしで旅行する

水なしというのは砂漠を横断する場合に、何日間水なしで旅行するというような形で、あくまでも旅行の行程というのは水を基準にして決めます。

たとえば水無し四日旅行の場合は、四日間、水をやらなくてもいいラクダを連れていくという形で、旅行の種類の名称が違う、その種類の名称によって連れていくラクダが違う



ラクダも給水能力で区別されている(19C、ベドウィンの家族)

という形で、やはり旅行の場合にも水によって判断していくわけです。

水飲み場と相棒と

それから水場というのがありまして、井戸の場合が多いのですが水飲み場ですね。これも四種類の名称があります。この場合は面白いのですが、水場というのを用途別と水質別に区分けしています。まず用途別のほうで、人間だけが飲む水場というのがあります。これはマウリドといいます。ラクダ、羊その他家畜用の水場というのを、マンハルといいます。マウリドとマンハルの区分けというのは、『コーラン』で厳密に言っています、マウリドのほうでラクダに水をやってはいけない。逆に、マンハルで人間は飲んではいけないというふうに、用途によってはっきり区分けしています。この場合は、水質には全然関係なしに、ここはラクダ用、ここは人間用というふうにはっきりさせています。ラクダの水を人間が横取りしてはならないわけです。

マウリドというのは人間用の水場なのですが、これはアラビア語で知識という意味でもあります。しょっちゅう使う言葉です。知識の根源は水飲み場だという思想からきているのではないかと思えます。アラビア人がマウリドと発音すれば、知識という言葉と同時に水飲み場も意味しているという形で

す。

水質の上の区分けとしましては、マシユラウという水飲み場と、バクアというのがあります。マシユラウのほうは上質の水が出る所をいい、バクアというのが濁り水です。そういうような形で、水飲み場にしましても用途によって名称が違ふし、水質によっても名称が違います。

水質の中で一番汚い水のことをスバーバといまして、いかにも汚なような感じがしますが、日本語に訳す場合は残り水とか死に水とか、そういう言葉に訳されています。スバーバに集まるのは、鳥、野獣など一番弱い動物たちがそこに集まるという形です。

その他、アラビア語の中で相棒という場合、二人でベアを組んで行動するということがアラビアの場合多いのですが、その場合に「マリーフとマリーフ」という慣用句がある。これは意味は相棒なのですが、実際には井戸に繩を垂らして一人が降りていって水を汲み、もう一人が引き上げるというふうな井戸を使う場合に二人がベアになって水を汲むという状態なのですが、その場合に井戸の上のほうに待っているのがマリーフで、下までいって水を汲むほうがマリーフなんです。そういう事でマリーフ、マリーフといったら相棒という意味です。

アラビア語の場合は、二人連れとか二人ベアというのは非

常に言葉が多くて、数詞というのは普通、単数と複数しかないのですがアラビア語には双数というのがあります。名詞なども、単数、双数、複数とあります。これはやはり遊牧民族で、オス、メスのペアで一個と考える思想があるのですが、そういうふうなところからマリーフ・マーティフもきたのではないかととらえております。

ともかくこういうふうな関係で、アラビア語にしまして水によって等級分けをするというのが非常に顕著に出ております。これも、やはり水が貴重な所であり、水が決め手になっていくというところから来ているのではないかと感じられます。

上下水道の原点は

最後にちょっと付け加えさせていただきますと、要するに私たちの上下水道なんですけれど、これは普通西洋から来た思想だと言われているのですが、技術的な水処理などは別にしまして、一つ町があって、その町をどういう形で清浄化していくかという基本的なところは、どうもアラビアのパラダイスといえますか、楽園の思想から来ているという感じが非常に強いんです。それは、これからもずっと調べていきたいと思うのですが、その場合もさっき申しましたように非常に思想的などいいますか、清浄でないとは本当は信仰者ではない

のだと。清浄を町全体が保つためには、上下水道を含めたあらゆる水環境を清浄な形にしなければ、全員が本当の回教徒にはならないのだという思想から来ているのだと思うんです。そのへんを、これからも調べてみたいと思うのでけれど。

スペインなどの場合は、歴然としているんです。あの国はもともと、上下水道はあまり進んでいないということなのですけれど、たとえばマドリッドというのは非常に不潔で、スペイン人の女性などは長いスカートで歩くでしょう。ああいったものも、不潔な状態を全体に被り隠す目的もあつたそうです。そこへアンダルシアから来た回教の人が見て、マドリッドの町へ入った途端に鼻をつまんで、とにかく住めないの南からアフリカ北岸にかけての都市は、上下水道を含めて清潔感のある町だったということが、いろいろな本から読み取れます。そういう意味で、普通の常識とはちょっと違うところがある。アラビアの持っている、良い面ではないかと思うのです。

討論

稲場 ちよつと二、三点お聞きしたいことがあるのですが、今おっしゃった清潔という点、雨量が年間八十ミリぐらいで、非常に乾燥していると思うんです。ですから、ラク

ダの糞でも家畜の糞でもいっぺんに乾燥してしまつて、燃料にするという状態になっているんでしょ。そういうことからすると、案外、水がなくても清潔なんじゃないかという感じがするんですけど、そのあたりどうなんでしょうか。元々アラビアの人たちが住んでいる所は、あらゆるものが乾燥する所で、水によって不潔になるというようなのではないのではありませんかと仮定した時、だから元々清潔なのではないか。清潔を確保するためにアラビアの人たちに上下水道が必要だったのではないかとおっしゃったのですが、たとえばアラビアの人たちがスペインとかアンダルシアのほうへ行つたら、雨量が多いから不潔だと。自分たちが住んでいるところは、何でも乾燥しちゃうから清潔だと。だからスペインのほうで上下水道をつくつたと、そういうことなのでしょうか。

清潔というのは、どういうことなのでしょう。あらゆるものが乾燥する所で、汚水だつていっぺんに乾燥してなくなつてしまふはずなのですが、水そのものがごく少ないために、相対的に不潔度が高いといえますか、そういうようにも思えないわけではない。あるいは水そのものが地表水でなくて地下水だとすれば、地下水の水を汚すというようないふことがあつたかどうか。そのへんの清潔というものの周辺を巡つて、ちよつと教えていただけないかと思うのですが。

石丸 直接的なご返答にはなつていないと思うのですが、

一つ言えますことは砂漠とオアシスがあつて、少なくともムハンマドは砂漠地帯のほうをよしとして居るんです。たとえば、農耕地は熱病の発生地として恐れられていたというようなことが出ています。ムハンマドというのは商人で、あの地域にメッカというのとメジナというのがありまして、メッカのほうは砂漠地帯で何もありません。メッカが隊商の中心地だったというのは、そこにザムザムの泉というのがありまして、泉があつたためにメッカの町ができました。現在もそうらしいですがメッカには緑が殆んどないんです。完全な砂漠地帯だけど、その中に水だけがあつたという所なのです。水を頼りにしてキャラバンの中継地ができて、そこに集落ができて、その出身者がムハンマドなんです。ムハンマドは商人として、メッカを起点に、シリアのほうへ隊商でずつと行つていました。

そのメッカの近く、歩いて二日の行程のところはメジナという町があります。そこは、オアシスなんです。そこでは農耕生活も営まれていて、主にユダヤ人が住んでいたらしいです。メッカは砂漠地帯で緑も何もなく、メジナのほうは農耕地帯だと。ムハンマドは、メッカのほうが清潔で良くて、メジナのほうは不潔だという考え方を持っています。それが『コーラン』にも出てくるのです。

そうすると、水があつて、水の近くですと疫病もあると、

そういう基本的な考え方がどうもあつたのではないかという感じがするんです。水、水と言っているのですが、水が豊富で溜まっているような所は、逆に清潔感からいうと良くないのだという考え方があつたのではないかという感じがするんです。

稲場 だから、水のある都市には上下水道を整備した。(笑)

石丸 それで、おっしゃる通り砂漠地帯からスペインのほうを通りまして、雨の降るような所へ入っていった場合には、まずその町に住むための清潔感ということを考えまして、い水をとってきて、水はけもよくするという形になつたのではないかという感じがするんです。

谷口 アラビアという地域は、これは本当に抽象的で、意外とどうなっているか分からないですね。それでたとえば、オリエントと呼ばれている所もなかなかよく分かりにくい所で、結局、時代によって変わっている所がありますでしょう。たとえば、バグダッドもその昔はバビロンと呼ばれていて、アラブ人とユダヤ人で取ったり取られたり。そういう点で非常に分かりにくい所なのですが、同じような地域で、チグリス・ユーフラテスよりももう少し上流のほう、トルコに近いのですが、いわゆる世界最古の文明地帯あたり、ああいう所では狩猟から遊牧、それから農耕という流れがありますね。もちろん、農耕が豊かになり牧畜も並行して行われるわけな

のですが。ところが、農耕が始まって生産力に余裕が出てくると農耕が都市をつくるわけです。都市をつくった時に、ユダヤ人の祖先などは、神殿をつくるわけですね。その神殿を中心に町が形成されるわけですが、その時に、どうも沐浴場らしい跡がありまして、そこから上下水道が生まれてきたらしい。多分、世界最古の下水道だと言われてますね。アッカド王朝に見られる下水道は今では多分、これは宗教施設であつたと言われます。今でいう、公衆衛生的な施設ではなく、神官とか王様などが沐浴をして、沐浴に使った水は速やかに排除しなくてはならない。それで、ただ地中浸透なんですね。

アッカド王朝でそういうのがあつたかどうかは分かりませんが、地中海のほうにミノアというのがありますね。そのミノア文明の跡を掘ってみますと、そこにも下水道があつた。しかも、それが皆地中浸透になっている。というのは、地下に浸透させるということは、死者は地下に眠っているので死者に水を与えなくてはいけないという、水を排除するというのもっと宗教的な意味があつたというような説もあるようなのです。マホメットは七世紀ですね。そうするとこの地域とは交流がありますね。ですから、思想といつてもその地域特有というより、かなりいろいろな地域のものがゴシャゴシャに入っている感じはするんです。

石丸 そうですね。そう思うのですけれど、これは例えば『コーラン』。第一章から第十四章まであるのですが、この宗教は非常に変わっていきまして、普通、宗教というのは人間の精神面だけにかかわる文化だと考えられるのですが、『コーラン』の場合は半分ぐらいまでは日常生活の教えなんです。残り半分が精神生活なんです。『コーラン』というのは、一

番最初の章は、ずっと遅くにつくられたらしいんです。だから、ページを追ってだんだん古くなって、一番最後の章が一番最初の啓示に属するんです。ちょうど、逆になっています。文章としても長い順に並んでいきまして、一番最後になると教行で終わります。そういうふう配列されているんですけれど、その場合も初期のほうの啓示というのは、非常に宗教的な話が多くて、後半、段々啓示内容が変わってきます。一番最初の啓示の時は天国とかいったことはあまり出ないんです。ちょうど、神がかりの様に、はっきりしないようなことを口走ったというような感じのものがそのまま文章になっているんです。

そのうち、だんだん日常生活というものに慣れてきまして、ムハンマドの周辺にあったユダヤ教とかキリスト教なんかを勉強していきまして、だんだん日常的話になって、後期になると離婚はこうしろとか、妻は四人持つてもいいとか、直接宗教とか精神的なものに関係しない日常的な生活の教えと

というのがだんだん入ってくるんです。そういうような形態になっていまして、『コーラン』だけを見ましても言っていることは矛盾していることが非常に多いんです。

その周辺のセム系の民族のあらゆる風習を、その都度自分で耳で聞いて、それをムハンマドの言葉で述べていく。水に関する話も後期の部分に集中しています。

谷口 『コーラン』が編纂されるための目的のようなものがある、その目的を達成するための枠組みのようなところはあるのですか？

石丸 いろいろ学説がありまして、仏教という經典の結集といいますが、お弟子さんが集まって、自分はこう聞いたという話がありますが、ちょうどムハンマドが死んで……ムハンマドが死ぬ段階では宗教的な面と政治的な面が非常にあいまいな形で残されたんです。それで、政治的なものをガツチリつかまなければいけないということで、まずはムハンマドが生きている間にどういうことを言ったかというのをまとめようということになりました。死後十年ぐらいで関係者が集まりまして、ラクダの骨に書いているものとか、自分で聞いているものを、皆で集まりましてそれを書き留めたということになっていんです。

ムハンマド自身は文盲だったらしいんです。字が書けなかったので、コーランというのは話し言葉で、言った通りの話

が入っているんです。口語体だし、雑然としているのですけれど、要するにムハンマドが死んで、その後だんだんとましまりかけている宗教と政治とを一緒にしたような経典を、ここでガッチリ固めようと。そういう必要性がありました、主にムハンマドの親族が中心になりました、こういうふうなものをつくったということになっているのです。

ちようど、ムハンマドが死んだところに、もう死んだからいいということ、相当、離反者が出たらしいんです。離反していく人をリッダというのですけれど、そういう離反者をつなぎとめるためにも、どうしても口で言っているだけではなくて、書いたものが必要だということになって、皆で集まってこれを作ったということが言われています。

稲場 アラビアの人たちは、すべて唯物的な考え方によっているということ、したがって水について幻想などを持つことはまったくなく、こう言われました。一方では、水というのは完全に共有物で、公正な配分が必要だと、こういうふうに考えられていると言われました。ところが、そういう唯物的な人たちの場合、力によって水を確保すれば自分の思うとおりになるわけですから、いわばパワー・ポリティクスで軍事力などを使って水を確保して、その地域に君臨するということをやってもいいと思うんです。やるべきですよ、本来そういう考え方を持つ人であれば。ところが、そうでな

いようになつたわけですが、アッラーの神が出てきてそうになつたわけでしょうけど、アッラーというのが出てくる以前とというのは、骨肉争うという地域だったのでしょうか？

石丸 アッラーが出る前のことを、無明時代といひまして、ジャーヒリヤという言葉で表しているのですが、この時代は部族闘争の時代だった。対岸のエチオピアのほうから象の大群を伴って攻めてきまして、それで水場を荒らされたとか、とにかく流血の時代だったらいいんです。その当時は部族社会で、部族ごとに井戸水を求めまして、その闘争の繰り返しだつたらいいです。それは非常に有名な話で、そういう水争いが非常に盛んであつて、来世も信じなければ、とにかく各部族間で水をとるだけの戦争の毎日だつたと。

そういうふうな状態の中で、ムハンマドが出てきて、水は力のある部族に属するものではなくて、これはアッラーがつくつたものだ、だからこの世の水というのは全部アッラー一人に属するものだから独占はできない。共有にしなければいかんということをお教えたのだと。これは、『コーラン』には出てこないのですけれど、歴史関係からそれは強調されております。

稲場 ムハンマドというのは、余程偉い人だと思つたのです。というのは力を信じる以外に信じるものがないという、いわば野獣のような人間、あるいは人間集団、そういうものばか

りいる中で、彼等が水によって殺戮を繰り返している中で、ムハンマドは自分一人で、これはアッラーのものだと言う。信じられないような人間ですね、実際のところ。(笑)ムハンマドというのは、軍隊より強かった。

石丸 そのへんはちょっと不思議といえは不思議なんですけれど。ですから最初、これも伝説的な話で出ているのですが、ムハンマドというのは、二十五歳の時に四十歳の未亡人と結婚するんです。その四十歳の奥さんというのが、メッカの、現在で言ったら商社の社長だったんです。ムハンマドはその使用人だったわけです。そしてムハンマドが四十歳の時に、ある日震えがきまして、訳の分からないことを口走った。本人は、ムハンマドはその時、悪霊が乗り移ったのではないかと心配したというのですが、そのうちにだんだん言っていることがアッラーの教えに近いというか、正常なこと、皆が必要としていることを言っているのだということを、奥さんが、ハディースャというのですが、奥さんがムハンマドに逆に話をしまして、奥さんのほうが支援して第一の信者が奥さんだったというわけです。

そしてずっと旦那のほうを盛り立てて、だんだん聞いていって、こういうふうになったという話が伝わっているんです。だから最初は、ムハンマド自身がいろいろ情勢を知っていて、これは社会的にみても水を中心にして何とかしなければいけ

ないという発想でできた宗教ではなくて、最初は我知らずといますか。そしてだんだんムハンマド自身も成長していったといいますか、いろいろなことを見聞きしながらそういうふうになっていったという形になるんです。

最初はメッカから追い出されて、メジナのほうへ出るのですが、これを「逃走」といいますが、六二二年のヒジュラです。その時も、何でムハンマドが追い出されたかといいますと、メッカにクライシ族という部族がいたのですが、ムハンマドの教えに従うと、自分たちの独占している井戸水が全員に開放される。そうになると、自分たちクライシ族の部族の勢力なり存在価値がなくなる。この考え方は非常に危険だということでムハンマドを追い出したという話になっているんです。

そういう形で、だんだんと個人の独占物であったものが公に、神がつくったのだから全員で使わなければいけないという思想に変わってきたという形です。

稲場 今ちょっとおっしゃったのが、何となくしつくり分らない面があるんです。といいますのは、たとえば詳しいことは知りませんが、キリスト教などでも結局、今のようキリスト教が普及するというのは、その後ローマ帝国という強大な国家が、国家の力を伸ばすといいますか、そのための手段としてキリスト教を利用するといいますか。ですから、

キリスト教という宗教が国家によって裏打ちされるといいますか、そういう意味で国家というか政治というか、それと宗教が結びつくことによって、あれだけ布教ができて、そしてさらにそこへ経済とかいろいろなものが入ってきて、そして一つのキリスト教というものが社会的な国家体制の中に組み入れられることによって、現在のようになったのではないかと思うんです。

ところが、それと同じようなことがないかぎり、ムハンマドの宗教というものも、おそらくそんなに力を持たないまま潰れてしまったのではないかというように思うんです。ですから、あと一つ何となく説得力があるなど思うのは、いろいろな部族どうしが殺しに殺しつくして、弱い者ばかりになっってしまったとか、あるいは殺しに殺し尽くした結果、こんなことしていたらいかん、民族が滅亡してしまうという状況に陥った時、たまたま運よくムハンマドが現れて、そして、そんなことをしていたら民族というものがなくなってしまうんじゃないか。そしてたらこの世もなくなってしまうのだと。というところで、そういう教えを布教するといえますか。

ですから、そういう意味ではたとえばジンギス・カンみたいな何百万と殺し尽くす、一つの町なんてなくしてしまうというような殺戮の状況が、何十年、何百年と続いた後に現れたのではないかという気もするのですが、僕は、詳しく分か

りませんけれど、どうですか、こういう宗教というものがこれだけ世界的な力を持つというのは、世界的宗教の一つですから、キリスト教は国家なり政治によってバックアップされたというのが正しいとすれば、こちらのほうは何によって支えられたのでしょうか。僕は、ちょっと分からない点があるのですが。

石丸 たとえばキリスト教の場合は教会というのができ、司教をはじめ教会そのもののシステム化というのができたと思うのですが、イスラム教の場合はリーダーはいるのですが聖職者はいないんです。そういう意味で非常に非官僚的といえますか、そういうシステムというのはないんです。もちろん、カリフというのが中心で、カリフは政教一致ですから宗教と政治の両方の権威者として存在するのですが、その下に教会関係のシステム化というのは一切ないんです。

ですから、聖職者は当然いりません。ムハンマド自身も別に聖職者ではなく、単なる神のお使いであつたにすぎないという思想ですので、システムとか権力とかを集中して、それで布教なり統治をしていくという考え方ではないんです。それにもかかわらず、意外と早い時期にパツと広がります。キリスト教的な宗教社会システムというのが、回教には認められないですね。

「剣かコーランか」ってよく言いますが、不思議なんです

がそういう事例というのは、ほとんどないです。攻め込んでまいりまして、その宗教を信じないものは人頭税を出せと。信じる者はいんだという形で、布教しているんです。だから、非常に殺戮的に、たくさん人を殺して信仰させるという形で浸透したものではないんです。

あの時期、ちようどこういう教えを受け取るような土壌があったのかもしれませんが。

稲場 この前だって、カーバ神殿の中で襲った者がいるでしょう。あの襲った者なんて、両手両足を切断しているんですから。ですから、ものすごく敵しい掟といえますか……。

石丸 掟は敵しいですね。

稲場 だけど、それだけの掟をつくらないと、抑さえられないような人間なんでしょう、きつと。違いますか、アラビアの人たちというのは面白いですね。

石丸 掟に関連しまして、礼拝の時は皆、メッカの方向に向かって礼拝するんですが、そのやり方はハディース、言い伝えの教典みたいなのがたくさんありまして、宗派によっていろいろ違うのですが、たとえば地球上のどこにいてもメッカの方向に向かって礼拝しろということになっているのです。元々アラビア人というのは貿易商人でして、地球上をグルグル回っていますが、その中でこういう規定があるのです。ちようど地球上でメッカの真反対のところは、太平洋のモルッ

カ島らしいのですが、たまたま船でそこにさしかかった場合に、どの方向に向かっててもメッカの方向だという場合は、リーダーが示す方向に向かって全員礼拝しろという規定が残っているんです。だから、ちようど地球のまったく裏側の場合は、どの方向に向かってもいいのだけど、リーダーが一番最初にぬかづいたら、同じ方向に向かって全員で礼拝しなさいという規定になっているんです。

それぐらい、そういう面ではいろいろな規約が徹底しているんです。非常に面白いです。(笑)モルッカ島およびサンドイッチ島の場合は、というような規定です。

北川 先程、だんだんイスラム教として普及していく時に、稲場さんのお話に近いのですが、階層的には下のほうといつてはおかしいですが、そういう部分からジワッと広がっていったものなのか、それとも上層の特権階級的なものが帰依して下に広がっていくような形で広まっていったものなのか、そこらへん広まる時の形態はどうなのでしょうか。

石丸 かならずしも具体的なことは分らないですが。

北川 砂漠の思想だと思のですが、一方でエジプトのようにならかなり都市的な高度の文明があって、回教が普及した頃には衰退していたかもしれないですが、地中海付近にはかなり都市的なものがあつたと思うのです。そういうところに入つていった時にリアクションというのですか、生活様式がま

まったく違う集団がいたと思うのですが、そういう所でスムーズに広まっていったものなのか。水も豊かだし、物も豊かな時代に、どういう形で普及が進んでいったのかという素朴な疑問が出たのですが。

石丸 これはとてもあいまいなところがあるのですが、『コーラン』の教えそのものが（そのあたりにはすでにキリスト教、ユダヤ教の信者がいたのですが）、イスラム教というのはアッラーの神が一番上にいまして、一番最初にアブラハムがアッラーに帰依したといいますが、アブラハムが出てきてモーゼが出てきて……。ですから旧約聖書の世界がありまして、その次にキリストに啓示されて、一番最後に来たのがムハンマドだという経過なんです。ですから『コーラン』に出てくる話は、旧約聖書も出てきますし、キリスト教の話も出てきます。最終的に『コーラン』の話になるのですが、とにかく宗教のほうでまいますとキリスト教、ユダヤ教は駄目だというのではなくて、あれもそうだったしこれもそうだった、もっとも今日的なものがイスラム教だという思想なのだと、非常にあいまいなことを言うんです。

これは『コーラン』のそこら中に出てくるのですが、ムーサーなんて書いてあるのは、モーゼです。それからキリスト。キリストの場合も、キリストとかイエスとかという名称ではなくて、ナズリニーユンというのですが、ナザレ人という形

で出てくるんです。マリアも、マルヤムと。とにかく、思想そのものは引き継いでそれをアラビア化して、モーゼも偉いしアブラハムも偉いしキリストも偉いのだけど、一番最後に出てきたのはムハンマドだ。ですから否定するのではなくて、教えは全部肯定して伝わって、現在はこうなんだと。そういう思想なんです。

ですから決してキリスト教徒を排撃するのではなく、それもそうだと。しかし最終的なものはこうだから、これに従えという形で教義そのものは非常にオールラウンドなんです。そういうふうな感じでまいて、一方では共有の思想。全部、この地上のものは神がつくったものだから、みんなが共有にしていこうと。そういう教えですから、さっきおっしゃった一番上の権力者からどうというのではなく、権力者を倒せば、下のほうは割と回教の思想には馴染みやすいというか、そういう形ですつと伝わったのではないかという感じがするんです。

もう一つ、この時期非常にアラビアを中心にしてアフリカからヨーロッパまでさつと伝わるでしょう。これは、宗教そのものの力によって伝わったというよりもむしろ、西洋史で民族の大移動があったでしょう。ああいうムードに乗りましてパッとアラビア人そのものが爆発的に散ったのではないかという考え方もあるらしいのです。ちょうどあの時期、七世

紀ぐらひはアラビア半島で人口の急増がありまして、元々砂漠地帯だからそういう所で人口は養えない。そしてパッと散った。散る時に、『コーラン』とか「ハディース」を持って散っていった。受け入れるほうも、比較的順調に馴染んでいって、パッと広がったというのが歴史的な感じとしては言えるという話がありますけれど。

宗教的には、教義からいっていい加減なところか、何でもよろしいと。そのかわり、唯一の思想は神は一人だと。アッラーだけだと。キリスト教もヘブライ教も、全部アッラーの神の指示によって行動したのだけど、ムハンマドが最後だと一番最後の啓示がアラビア語で伝わったから、『コーラン』というのはアラビア語で書いてある。『コーラン』の文章は、アラビア語で朗読しなさいという形になっているわけです。

たとえば砂漠で形成された宗教が、インドネシアでは国民の殆んどが回教になっています。これは気候風土は全然違うのですが、やはり伝わっているわけなんです。そういうふうな、教義からいけば非常に大まかです。そういう中で共有の思想というか、公正な面があったわけです。

藤森 岩波文庫『コーラン』では「金銀財宝も、地位も身分もなくなってしまった」という訳し方をしている。これは水の話ではなく石の話ですが、二、三日前のラジオを聞いていましたら、ピラミッドというのは日本でいってお寺やお宮

に石燈籠を寄進する、奉納するのと同じように、一般の庶民が信仰の心の現れとして積んでいったものではないかという説があるという話をしていたのです。日本人だとちょっと理解できない宗教心があって、インドですとかこういう所ではとてつもなく延々と、一人の王様が支配の及ぶ十年や五年であんなものができたのではないわけです。そうすると、なるほどそういう宗教心の現れがああいうピラミッドをつくったのではないかという気もしていたのですが。

それからすると、そういう国民が、金銀財宝、地位だとかいって一部の人ならいざ知らず、多くのほとんどの民族の九割ぐらひの人たちというのは、こういう気持ちというのは果たしてあるのでしょうか。蓄えようとかという気持ち。それよりも、神とともに生きるとか、宗教とともに生きてしまつて、一生をそこに注ぎ込んでしまふのではないかとすると、この訳というのは日本的な訳なのかという気がするので、そのへんはどうなのでしょう。

稲場 ものすごくドライじゃないかと思うんです。というの、本多勝一さんの『極限の民族』の中にアラビア民族のことを書いてあるのを読むと、何かあがるでしょう。たとえばドラビダ族なんか、接待してうっかりお客さんが行くとかならず、お返しをちゃんと請求するわけです。ちょっと接待してもらったら、その三倍も五倍もとられると言うん

です。そんな雰囲気を書いてあったんです。だから、すごく唯物的というか、ちょっと悪いですが、ドライなんです。だから、こういう訳はある意味で正しいのではないですか。信じれば、こういうものが全部、自分のものになるという意味でしょう。金銀財宝も、地位も身分も。これがなかったら信じないような、民族なわけです。

藤森 そうですかね。

稲場 そうだと思ふな、僕は。よく分からないけど。日本人だけじゃないですか、きつと。宗教とかそういうことのためにあらゆるものを売って。言い過ぎかもしれないが、日本人のような清貧とかそういうようなことにロマンを感じる民族ではないわけですよ。

石丸 非常に唯物論的な考え方だと思ふのですが、『コーラン』の中にも回教徒の場合は奥さんは四人までいいと書いてあると言われているでしょう。これは四人までいいと書いてないんです。数人はいいと書いてあるんです。ちょうどムハンマドが出てきた時期というのは、部族闘争の盛んな時代代して、男女の比率が一对四だったという説もあるんです。未亡人と孤児を均等に、自分の正妻実子と同様に四人までは娶って責任をもって、対等に養えという教えじゃなかったかという感じなんです。これなど、非常に唯物論的といえますか、とにかく当時の社会システムのなかから出てきた割り切つ

た考え方で、いいというふうに言ったのではないかと思うのです。宗教的に考えた場合、ちょっとおかしいと思うのですが、そういう合理的な必要性から、四人までいいということになっていったという話なんです。ですから逆にいったら、そのほうが現実的というふうなもの強いんです。

稲場 なるほど。そういう意味では、金銀財宝、地位、身分がないと生きていけないような、ものすごくドラスティックなところなのでしょう。

石丸 『コーラン』を見えていますと感ずるのですが、商取引的な感覚で書いているんです。アッラーを信じて、アッラーに投資をすれば得するとか、損得勘定で進めるという商業的なニュアンスの表現で説得している部分が非常に多いです。これなども現実的な話だと思ふんです。決して、仏教とかキリスト教のような宗教的な哲学に沿って説かれたものではなく、非常に現実的な感じで説かれているんです。アッラーに投資するほうが儲けが多いとか。反対の場合は、大損という感じで、非常に面白いです。

そういうことから、こういうふうにすれば水は与えらる。例えばラクダの背中のコブの水とか、動物の胃袋の中に入っている水もアッラーのものであるとか、とことん全部自分のものだ。全てを恵んでやったのだ。アッラーを信じている人間には与えようと。そうでない人間は、何も与えないとい

う形で使うわけです。

ですから、説得の仕方、あるいはものの考え方は非常に現実的です。抽象的な感じは、『コーラン』の中には一切ないです。

照井 たとえば日本人だったら、水が枯渇した場合、雨乞いとか水ゴリなどをやりますが、そういったものを、あそこは気候が乾燥地帯で雨乞いなんか考えられないのでしようけれど、それと似たような宗教的なものに委ねるとか、そういうことはないのでですか？

石丸 それは、全然ないです。不思議なくらい、ないです。アニミズム的な発想というのは、一切ないです。逆にいいますと、唯一神というのがあまりにも徹底しているんです。「ピスミッター」といいますが、これは何もかもアッラーのおぼしめしであると。だから、水に飢えて死んでしまっても、それはアッラーのおぼしめしだという形なんです。

ですからあるものを、神が与えているものに対しまして、これは不服だからという形でお祈りしてもらおうというふうな形では出ないみたいです。全部そうです。それは、もっと深い神様の、アッラーの思うところあってそうなっているのだという形で、決してこちらから注文しようとしません。具体的なものを要求しない。ただひたすらアッラーを信じよという発想なんです。そのへんが、非常に違うところではない

かと思うのですが。

照井 それと、石丸さんが水を基準にして名称があるといいましたが、アラビア語自体、語彙は豊富なのですか？

石丸 普通に考えて、多くて当然の分野に語彙が少ないんです。その逆に、ラクダとか砂漠とか、比較的水に関係するような言葉の使われ方というのが非常に細分化して、多いんです。

照井 生活に密着している言葉ですね。

石丸 そうです、それが多いんです。私たちはラクダを見ましても、それはラクダにしかすぎないのですが、厳密にはみんな違うらしいんです。使い方も違うし、その違い方によって、名称も違うんです。非常に偏っているんです。逆にいいますと、重要な語彙というのは、一つの言葉でいろいろな意味になっているんです。

たとえば「シャリーヤ」という言葉がありますが、これは法律という意味ですが、法律であると同時に、砂漠の水飲み場に至る道のことをシャリーヤといいます。そういうふうな元々の意味で使われているのか単なる法律を示しているのかというのが、文脈をみないと分からない。元々これは七世紀の語彙が中心になっているわけですから、現代の生活では賄い切れないような言葉があります。そういう言葉というのは語源的には一つの言葉によっていろいろなものに使い分けし

ている言葉なんです。ですから、非常に理解しづらい面があるんです。

シャリーヤというのを辞書で引いてみますと、第一番目に「ウェイ トゥ ウォーター」水への道と書いてあるんです。二番目に「イスラム ロー」と書いてあるんです。ウェイ トゥー ウォーターとイスラム ローとは全然関係ないような感じですが、それは本来水へ向かう道というのは一番大事な真理の道だという形で、法律というのは水へ向かう道を示すが如きものだというように、そう理解しないと分からないんです。そういうふうな表現の言葉が、非常にアラビア語の場合多いです。

ですから、『コーラン』の時代の言葉の真意を知っていないと、現在、どういう意味で使われているのかということが理解できないわけです。

渡辺 先程、便所のことを隠れ場所と、『コーラン』に載っていましたね。そうすると、そう考えていたということは、し尿についても、汚い物というところらえ方をしていたのでしょうか。

石丸 便所ということについて調べてみたのですが、『コーラン』にはし尿について言及していません。そのかわり、精液、これはしょっちゅう出てきます。精液とか、夫婦で交わった後はこうしろとか、そういうちょっとお

かしいような言葉があからさまにたくさん出てくるんです。遊牧民の言葉ですので、裸で、とか、そういう言葉は気がねなしにこの聖典の中に出てくるのですが、し尿というのはこないんです。どうなのかなと思うのですが。

渡辺 今のし尿の話なのですが、砂を非常に神聖視するという話でしたが、あのへんはおそらく砂に埋めて乾燥させたのではないかと思うのですが、神聖視することと始末したことが正しいとすれば、あい矛盾するような気持ちもするのですが、どうしたのでしょうかね。

石丸 たとえば日本人はし尿を、水洗ではないですが、高野山の廁などで分かるように水に流しましたね。そういうふうに、一方で水に流しながら、なおかつ水は神聖だったわけでしょう。アラビアでは砂の世界がちょうど日本の水の世界のように広々として、全部を掌握して浄化していく。そういう形でとらえているのではないかと思うんです。

ですから、し尿を処理するのも砂だと。ところが一方で、非常に清浄なものも砂であると。ちょうど、日本などで考えている水観イコール向こうの砂という感じが非常にするので。非常に豊富にあって、無限にある。日本の現在の水がどうかは知りませんが、だから水全体として豊富にあって、一方で汚しながら、他方、浄化作用によって一番綺麗な水だ、というふうなのと同じような感じを砂に対してもつ

ているような気がしますね。これは、非常に面白いと思うのですが。

そうなると、豊富であるということが一つの基盤になっているのではないかという感じがするのです。そこへいくと、アラビアは水そのものの量的なものが少ないわけですから、そういうものを水に求めるということができないのです。

谷口 先程、非常に現実的な思考をする民族だということでしたが、そうしますと『コーラン』にはたとえば旧約聖書に出てくるような洪水神話のようなものは出てきませんか？

石丸 出てきません。

谷口 それは、どういう意味でしょうか。旧約の場合は、洪水というのはチグリス・ユーフラテス川の下流の話ですね。ところが洪水を経験したことがない上流の人たちが、この神話を取り入れているわけですね。その一つの思想というものが、彼等の自然観といえますか、自然というものは人間に対して恩恵を施してくれるというよりも、むしろたとえ水といえども時には人間に敵対するのだ、だから自然に甘えていたら生きていけない。だったら何かにすがらなければ生きていけない、ということ、そこで神が出てきます。しかも、水というのは農耕をするような場合に、洪水とか水の出入りがありあまり強くなると農耕に影響を与えますので、おとなしくしてほしいということ、人間と神の仲介役をするのが王様だ

とか神官とか権力者の権威になっていくわけですけど、洪水神話というものの中には、自然観というものを象徴しているように受け取られているわけです。そういうために、彼らにはあえて洪水神話を、自分が体験していないにもかかわらず取り入れたのだと言われていますが、『コーラン』という洪水ではどういふふうな形で受け取られているのですか？

石丸 これは、非常に単純なのです。ムハンマドは洪水神話を、耳から聞いて知っています、洪水神話を自分のアッラーの神の教えを伝えるために、単にそのストーリーを使っているだけなんです。背景とか何とか、どういう意味をもっているかとかいったことは、まったくありません。これはすべてそうですが、それこそ旧約聖書からいろいろ話が出てくるのですが、換骨脱胎と言いますか、すべてアッラーの教えによって洪水を出してやって、ノアはアッラーを信じたから助けてやった、そうでないものは、アッラーの教えを信じなかったからみんな亡びたのだと、非常に単純な形でしか述べていないです。それは、徹底した単純さです。

創世紀の話からたくさん出てくるのですが、一番有名なのはエジプトのヨセフの話があります。この話は、『コーラン』に一部始終出てくるのですが、要点は、アッラーがこういったからこうなった。だから、ストーリーはまったく旧約聖書のヨセフ物語とそっくりで、考え方はそっくりアッラ



モスク塔から「コーラン」を朗誦する
(170、トルコのミニアチュール)

ーがこれを示して、こうなったこうなったというふうにして、徹底的に換骨脱胎しているだけなのです。そこから本当の意味とか、自然界と人間と神との関係とか、そういうようなことというのは、一切関係ないんです。

ですからその当時、一般の人が旧約聖書のストーリーを知っている、その知っているということを前提にしまして、そのストーリーの本当の意味はこうなんだよという形で、洪水物語なども使っているのですけれど、本当の意味はこうだったよという言い方は、アッラーがそうしたのだよという形ではアッラーだという形では出でてこないです。

余談ですが、アラビア語で、水のことをマールウというのですが、マールウというのは水の単数形でして、複数はミーヤーフといえます。水に単数と複数があるんです。これは最初私は重要な意味があるのかと思って調べてみましたら、大勢の人間が使う場合には複数形の水をつかって、一人の人間が水をこうしたという場合には単数形を使います。水に単数形と複数形があるというのは、非常に変わっているというか、面白いんです。

中村 『コーラン』というのは、アラビア人とかイスラム教徒は、どういう使い方をしているんですか？

石丸 これは、本当に日常的に使っているんです。

中村 聖書を使うように、使っているわけではないですか？

石丸 そうではないです。私は一番最初に、読んで退屈したという話をしたのですが、実際に読んでもらったら分かるのですが、繰り返しが多く、言っている思想的内容は面白いんです。どこがいいかといいますと、サジュウといいますが、口語体と文語体の中間の詩のような格好になっています。それで、朗誦して聞いていると非常に気持ちがいいんです。荘重で歯切れが良く、ラクダの泣き声に似ているとも言われますが、とにかくちょうど神がかりにあったように、念仏なども陶酔状態でやりますね。聞いて耳触りがいいんです。そういう形で音唱するんです。それで、「コーラン」というんです。

『コーラン』というのも、正式な発音はクルアーンというのですが、これは「朗誦するもの」というふうになるんです。だから、読んで、意味がこうだというのではなく、耳に聞いて快いというのが、元々の意味なんです。ですから、よく回教のラマダーン、断食の入りにもスクから『コーラン』を朗誦するのが放送されるのですが、これは聞いていますと非常に朗々として哀愁があつて、非常にいいです。

非常に朗々としていまして……これはスーラ・トゥル・フアーティハという『コーラン』の序章ですけど、私のは全然

なっていないですけれど……（朗読略）

このような感じで、私の発音はよくないですが、喉から搾り出すような、めすラクダの泣き声に近い形で発音しろとか、いろいろあるんです。喉から引っ張り出すような言葉で朗読するような形で、ここにいろいろ書いてありますが、ここは長く朗読するとか、そういうのがあります。

『コーラン』というのは朗読するための文章なんです。ですから内容云々ではなく、聞いていてウットリするという、一つはそれなんです。一つのストーリーを追いつつながら、調子のいい言葉がドカッと入ってくるんです。なんでこんなところろにこんな表現が出てくるのかは一切関係なしに。文法的にはへんですが、聞いている人には非常に心地良いんです。

そういう面もあります。アラビア人の場合は小さい頃から朗唱しています。読んで気持ちがいい、そういう形で普及しているんです。非常に面白いですね。

谷口 聖書なども、そうらしいです。今みたいに読むのは、印刷機の発明以降ですから、それ以前は読めないから。聖職者は読んで聞かせたらしいんです。ただ、聞いているだけでは退屈だから、それに節をつけたりハーモニーをつけたりというので、賛美歌ができてくると思うんです。カトリックのグレゴリアンなんかは単純ですが、聞いていると恍惚状態になるんだそうですね。

今でこそ、聖書などは読むから理知的に考えられるんですが、本当は理知的に考えたり理屈をこねるのではなくて、聞いて、感覚的に感じていければいいと思います。大体、宗教というのは、そういうものらしいですね。

中村 お経もそうだし。

石丸 そして、全体から受ける感じで一番近いのは、私の感じでは、スペインのフラメンコで男が歌うでしょう、あの感じが一番近いですね。耳から聞いて感じることは、非常に哀愁的なんです。

谷口 耳で聞くだけではなくて、物語のようなものを絵で表現する。今度は、目で感じるようになる。だから、こういうふうには印刷されるようになってからは、理屈をこねるようになってしまったんですね。

石丸 そんな感じがしますね。

稲場 音楽の発想も入っているんですかね。

谷口 音楽というのは、元々、宗教でもあったと思うのですけれど……。

稲場 なるほど、面白いですね。

谷口 モスクに上水道があったとおっしゃいましたね。あれは今でいうカナートと言われている地下水道がありますね。あんなようなものでモスクまで水を持ってくるのですか？

石丸 ええ、何かそうだったみたいですよ。

渡辺 モスクで使用した後の水は、滲み込ませませんでしたか？

石丸 排水は砂漠のほうへ出すという形です。一つの町がありましたら、これはカシユガルの例ですが、通称「水の門」と「砂の門」があるんです。水の門というのは、引き入れるほう、砂の門というのは出すほうなんです。ですからモスクがありまして、水の門から給水してきて、砂の門を通して砂漠へ出す。砂漠で浄化してもらおうという形なんです。ただ、教えの中にモスクで使った水盤の水は、大事にとって付近の野菜畑に撒きなさいという教えがあります。ですからそういう面では、水盤の水はとっておいて灌漑などに使う、まとまった水は砂の門を通して出す。だから、浄化は砂漠に任せるといふ感じですよ。

渡辺 テレビで上水のほうはやりましたが、排水のほうは見なかったですね。気をつけてみていたことがあるんですけど、排水のほうはどう思ったのですが、飲むほうの水はかなり綺麗なものでしたね。排水のほうは、ついにい出ませんでした。撮るほうに関心がなかったのかどうか分かりませんが。

石丸 さきほどの谷口さんのお話ですが、メッカの場合は湧水、旧カイロ、バグダードなどは河川水、イランはカナート、そういうようなものを使って外部から水を給水してきて、

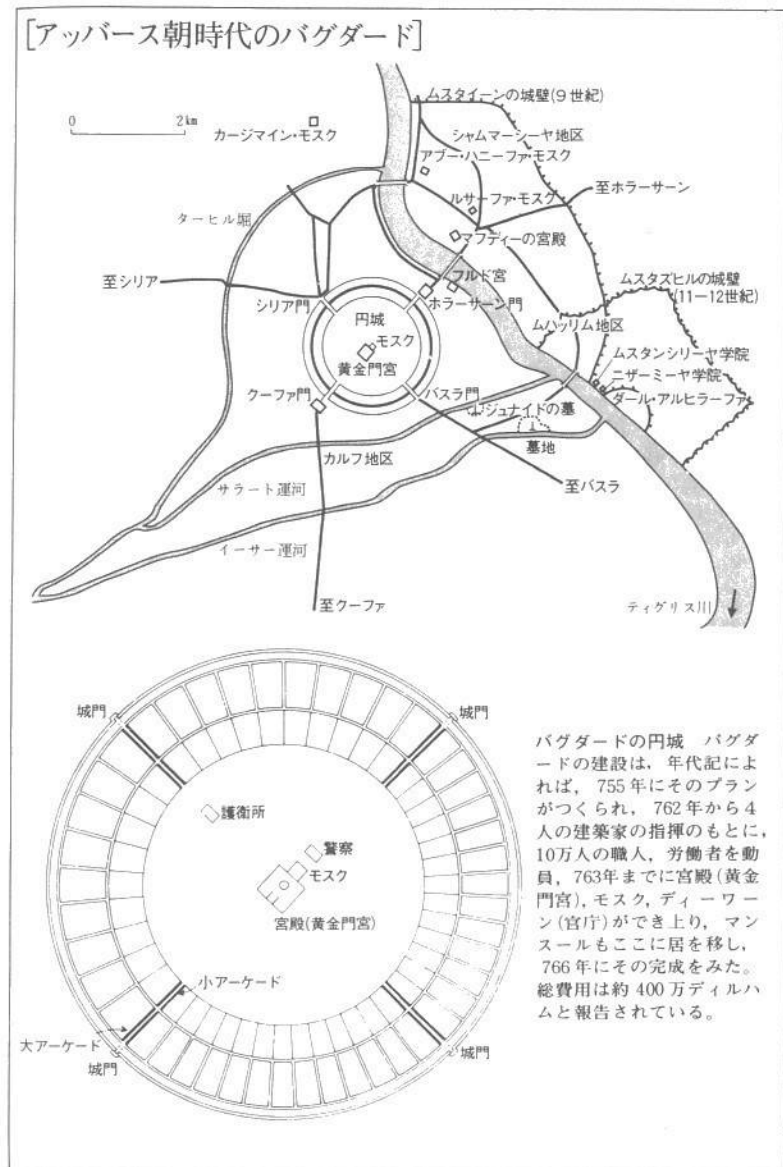
モスクの施設に導水するという形に、だいたいなっているみたいですね。

中世でしようけれど、たとえば一般の生活者にとって欠かせない公共施設に公衆浴場があつて、ハンマームといいますが、十二世紀のバグダードには大体五千箇所ぐらいの公衆浴場があつたと。その目的は、礼拝の時に支障がないように最寄りの公衆浴場に行つて身を清めてから礼拝する。バグダードには五千箇所、旧カイロ地区には千七百七十箇所あつたといふようなことが記録に残っています。ですから、町のいたるところにあつて、その水はそういうところから引張つてきて使われたということですね。

中村 マホメットの時代の、オアシスの水源は地下水ですか？

石丸 大体、地下水です。いわゆるオアシスの場合、水源はほとんど湧水、泉です。地下水です。河川は向こうでワジというのですが、河川というのは水はないんです。枯れ川といひますか。河川はそうだと。水というのは、湧水、地下水です。ただ、バグダードとか旧カイロ、ああいう大きな河川沿いの所は表流水がありましたけれど。表流水の場合も、いったん導水してきて使うという格好はとっているみたいですね。

渡辺 地下を流れている所がありましたよね。流れている



[アッバース朝時代のバグダード] (平凡社「イスラム事典」)

というか、テレビでみると水が動いていましたね。

石丸 カナートですね。カナートというのは、イランを中心にしまして一方は中国にまで達している。ですからイランとかの一部ではカナートを使って、これも山がないと引っ張れませんから。そういうようなものも、一部では使われていたということみたいですね。

渡辺 それの、やはり昔は取り合いがあるみたいだったですね。生きるために必要だったんでしょね。水争いみたい

に。

石丸 ですから『コーラン』に「霧々と河川流れる楽園」というのがあるでしょう。これによって、河川というのがどういうふうになっているかを文法的に照らしてみましたら、「ジャンナート・ミン・ターテイハー・アンハール」とありまして、アンハールというのは河川の複数です。ジャンナートは楽園。ミンターテイハーというのは、字の通りいいますと「彼女の下側から」となるんです。彼女というのは、この場合、楽園を指すんです。ですから実際は、「霧々と河水流れ」というのは、地下水なんです。楽園のイメージでサラサラと水が流れているのではなくて、文法的に考えますと地表の下に霧々と河川が流れ、ということになっているんです。これは、結局、地下水だということです。イメージとしては、普通に河川というものには水はない。霧々と河川流れという

のは、地下水だったらいいんです。翻訳の場合は、河川とそのまま書いていますが、そういうような形で、ほとんど地下水と湧水みたいですね。

谷口 アラビア語系の文物というのは、意外と文献は手に入らないでしょうね。だから、知らないんですよ。

石丸 代々木に日本イスラム協会というのがありまして、そこがかなり集めています。ただ、アラビア文化というのは、ちようど中近東です。一方にはヨーロッパがあり、他方にインド、中国がありましたから、日本から見ますと大きな文化が遮っていますから、ヨーロッパへも浸透しているし、中国、インドへも浸透しているのですが、その浄化を経て日本に来ているでしょう。ですから日本文化と中近東のアラビア文化というものが、ダイレクトにつながっていないんです。大きな文化圏を経由して伝わっているから、非常に文献も少ないし、いろいろな面でダイレクトな知見はできないんです。それと一つは、文字が非常にマスターしづらい文字です。

私は大阪外国語大学卒ですが、図書館に文献が詰まっているんですが、『コーラン』というのはこれ一冊ですが、『コーラン』に関係するハディース、これは仏教という如是我聞といいますが、私はお釈迦さんからこう聞いたという如是我聞で、そのことを「キーラ」というのですが、私は聞いたという話の伝承の文章が十万件ぐらいあって全部揃っているの

すが、誰も勉強しないんです。そういう本はいっぱい揃っています。

例えばギリシャ・ローマ文化がルネッサンスを通して西洋に伝わったということですが、これは本当はギリシャ・ローマの文化が中世にアラビア語に訳されて、そしてアラビア語に翻訳されたものが、ラテン語に翻訳されてヨーロッパに伝わったという経緯があります。イスラムの歴代の首長・カリフがお経を中国語に翻訳するようにギリシャ・ローマの文献を全部アラビア語に翻訳しろという指示をしました。「知恵の家」(バイト・ル・ヒクマ)といいますが、そこへ学者を全部集めまして、ありとあらゆるギリシャ・ローマ文献をアラビア語に翻訳しました。それが現在あるんです。

それを通して、今度はラテン語に翻訳したということで、既にギリシャ・ローマの文献で残っていない文献で、アラビア語に翻訳したアリストテレスの文献とか、そういったものが一杯残っているんです。そういう形で、文化財そのものは非常に膨大なものがあるのですが、さっき申しましたように非常に難解な言葉ですので、あまり使われていない文献なんです。

稲場 一つ知りたいのですが、水は共有とおっしゃいましたが、土地とかそういうものは私有ですか？

石丸 コーランの時代の話は、一切そのへんのこととは分か

らないのですが、さっき申した三本木さんの比較水法の論文をみますと、水は共有でしょう。水は共有だけど、共有する水がある土地というのは私有だと書いてあるんです。それで、土地は売買できるけれど水の売買はできないとか。ですから、地下水と土地の権利が一体的になっていないくて、水だけは違うのだという感じですね。

谷口 NHKで、『砂漠と人』だったかというのが出てくるのですが、それに写真入りで載っていますのは、お鍋の底のほうに均等に穴を開けて、水が出てくるとそれを汲んで、パイプのようなもので流すんです。流す時に、水量を均等に流すことに苦労しているらしいです。それで、均等に流す技術を持っている人は、権力者にとって非常にいい高級官僚になるんだそうです。(笑)

石丸 本当はそういう意味での水に対する均等感とか、この水は家畜でないと使つてはいけなやか、そういうふうな配慮を現実を守るというのは、かなり徹底した文化ですね。

谷口 それからちよつと思ひ出したのですが、表流水を使わないというのは、もちろん水がないこともありませけれど、たとえばワジなんているのも、年に何回か放流のような形で流れているんですね。キリストを迫害したヘロデ大王は、ワジにダムをつくつて水を溜めて、治下の村に導いたりして土木工事をやっているんです。あれは、表流水を使いますと、

たとえば表流水で灌漑などすると蒸発量が激しいから、地中の塩分を吸い上げて、表面の塩分濃度が高くなって、何年かすると役に立たなくなってしまうというようなことがあるんでしょね。ですから、バングラからずっと西のほうで地表の塩分を洗い流す作業を、国連がものすごいお金をかけてやっていますね。日本人も技術者を派遣してくださいと。表流水の感覚は今日本にいるわれわれとは全然違うという感じがしますね。

石丸 『コーラン』もそれに関連しまして、アッラーが前たちのためによく考えてやっている証拠として、表流水としてではなく、ラクダの背中の中に水を蓄えてやっている。それを砂漠で取り出すと、空気と混じって一層味が良くなるって書いてあるんです。

これも何かの本に書いてありましたが、あの中の水というのは脂肪らしいのですが、脂肪が酸化しましてちょうど飲みやすい形になるんですって。どういう味か知りませんが、それに関連するようなことも『コーラン』に書いてあります。それは、そういうふうにして、砂漠の中を旅行するための水の保存の方法を、アッラーはそこまで考えてやっているのだからという形で出てくるんです。

稲場 それでは、示唆に富んだ有益なお話をしていただき、ありがとうございます。

(昭和六十三年三月五日)